

## バードウォッチャーが形成する集団の類型について

### Study of a Category of Birdwatcher's Groups in the Field

高橋 正弘\*

TAKAHASHI Masahiro\*

\*大正大学

〔要約〕本研究は、フィールドで形成されるバードウォッチャーの集団を観察することにより、集団の類型化を図る試みである。分析の結果、以下の3タイプに分類できる。第一は、バードウォッチャーによる自発的かつ実質的な組織の形成が進んでいるタイプである。この集団は、バードウォッチングの愛好という活動のみならず、清掃を通じた保全活動なども展開しており、当該フィールドの保全への寄与は高い。第二は、フィールドでの鳥の出現状況によって形成される集団のタイプであり、形成に際してはある程度のコミュニケーションが契機となる。何らかの野鳥の出現にともない一気に集団が形成されるダイナミズムは、この集団に観察される。第三は、フィールドの外部における情報伝達によって大きな集団が刹那的に形成されるタイプである。特定の鳥が出現した際、その情報が非常に短期間にかつ広範に広まることにより、当該フィールドに多数のバードウォッチャーが集まって形成される集団である。

〔キーワード〕自然愛好家、集団、ナチュラルリスト、バードウォッチャー、フィールド

#### 1. はじめに

都市近郊の公園や、各地の自然が豊かな場所等で、趣味の一環として自然観察を行う人々、いわゆる自然愛好家と呼ばれる人々を見かける機会は、近年特に多くなってきている。例えば昆虫採集や昆虫観察、植物観察、レクリエーションとしての自然散策など、その活動はバラエティーに富む。

これら増加する自然愛好家の中でも、バードウォッチャー（野鳥撮影者を含む）に焦点を当て、それらがフィールドにおいて集団形成を行っているか否かを分析した結果、バードウォッチャー同士のコミュニケーションの頻度と規模を手がかりに、一定程度の集団化が行われていることが推察できる、ということが明らかにされている（高橋 2010a）。

ところが集団化の検討をする際に観察を続けてきたバードウォッチャーたちは、散在型の分布をする静態的な場面と、偏在型の分布

をする動的な場面との両方がみられた（図1）。これは、バードウォッチャーの行動タイプが大きく二つ、散在型と偏在型に分かれていることを意味する（高橋 2010b）。これは固定的な型ではなく、静態的に散在していたバードウォッチャーが、ある情報により偏在型へと変容していく動きが多くみられた。具体的には、ある種の野鳥の出現や出現情報により、フィールドの一定範囲に散らばっていた

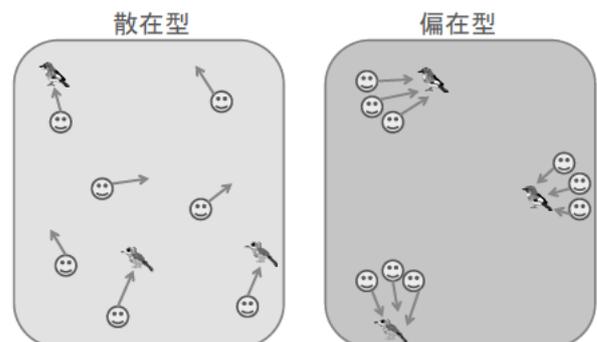


図1 フィールドでのバードウォッチャーの行動

バードウォッチャーが、その野鳥を観察・撮影するために出現した場所に集まってくる、という集団化の動きを見ることがある。

したがって、フィールドで形成されているバードウォッチャーの集団、特に偏在型で一定規模のバードウォッチャーによって構成されている集団には、タイプとしての特徴が備わると同時に、集団として何らかの意図が特徴的に見いだせることが予想される。

そこで本研究では、フィールドにおいてバードウォッチャーが具体的にどのような集団を構成しているのか、そしてその集団のタイプによって、構成員が自然保護に向けた寄与に差異が生じるか否かについて、検討することとする。

## 2. 研究方法

上述のとおり、本研究の課題は、フィールドで形成されているバードウォッチャーの集団の特徴を検討することである。そのため、バードウォッチャーが形成する集団のダイナミズムを追うことで、集団の特徴を明らかにすることができるかと仮定し、実際に集団形成が行われているさまざまな場面やケースを観察し、それらの類型化を試みることにする。

本研究で用いるデータは、多くのバードウォッチャーが集まる複数のフィールドにおいて、調査者もバードウォッチャーの一人として振る舞いつつ、バードウォッチャーの集団が形成されている場面を観察することを通じて、質的データを収集し、それを分析する。分析に際しては、調査時に撮影した写真等も利用する<sup>1)</sup>。

## 3. 結果

バードウォッチングという趣味は、一般的に野外で鳥を探したり野鳥を撮影したりする行為であるから、通常は単独の観察者が野外に出ていくことになる。そのため、フィールドには単独のバードウォッチャーが存在する



図2 単独で行動するバードウォッチャー

ことになる。特にバードウォッチャーをたくさん集める良好なフィールドにおいては、たくさんのバードウォッチャーが同時に存在することになる。図1のいわゆる散在型の配置がこれにあたる。

ところでフィールドで形成されるバードウォッチャーの集団について、散在型から偏在型への移行などのダイナミズムが発生している場面や、バードウォッチャーによって構成されている集団やその形態にはいくつかの類型が見られた。それらを詳細に観察し、分類した結果、3つのタイプの集団を類型として見出すことができた。本研究の便宜上、それらに組織的集団、偶発的集団、刹那的集団という名称を付与し、それぞれの集団の特徴を記述すると、以下のとおりとなる。

### 3 - 1 組織的集団

組織的集団と名づけられた集団は、バードウォッチャーによって自発的かつ実質的な組織の形成が進められているもの、もしくは探鳥会などの集団が一時的に構成されているものである。したがって集団の継続は恒常的、もしくは期間を限ったものであり、いずれも大きな変容をしない、という特徴がある。

この集団は、一緒に野鳥観察をグループ活動として行っているが、バードウォッチング活動のみならず、清掃を通じた保全活動なども展開しており、それに一定数の参加者が集



図3 フィールド清掃に参加するバードウォッチャー

まることにより、当該フィールドの保全への寄与は高くなる。

組織的集団を構成するのは、野鳥の会、自然保護グループ、地域の自然愛好の集まり、大学等の野鳥サークル、探鳥会への参加者、短期間のバードウォッチングツアーへの参加者等が挙げられる。図3は、埼玉県秋ヶ瀬をフィールドに活動するバードウォッチャーたちによって1995年に設立された「秋ヶ瀬野鳥クラブ」のメンバーが、毎年3月にフィールドの清掃活動に参加している場面である。清掃作業中は当然探鳥活動を展開できないが、普段趣味として通っているフィールドを清掃する、という意識がメンバー間に醸成され、具体的な保全活動を活動に組み入れていることが伺える。

### 3 - 2 偶発的集団

偶発的集団とは、フィールドにおいて特定の野鳥が出現することによって、その場で一時的に形成される集団である。偶発的集団が形成されるに際しては、バードウォッチャー間で一定程度のコミュニケーションが行われる。何らかの種類の野鳥が出現するにともなう、それまでフィールド内に散在していたバードウォッチャーが、一気に一箇所に終結し、小集団を形成していくダイナミズムが見られることは、この集団の特徴である。図1

の散在型から偏在型へと移行していく動的プロセスは、この偶発的集団が形成される際に見られるものである。

偶発的集団が形成される際のコミュニケーションは、すでに何かの野鳥を見つけて観察・撮影しているバードウォッチャーに対して、他のバードウォッチャーが「何か鳥が出ているか」をたずねたり、その行動の様子を見て自分でも野鳥を探しあてたり発見したりすることが主たるものである。また、通常はフィールド内に散在しているバードウォッチャーであるが、一箇所に複数名のバードウォッチャーが集まって特定の野鳥を観察している場合、その光景を離れた場所から見たバードウォッチャーは、その場所に何か特別な、もしくは貴重な野鳥が出現していると考え、その場所に急いでたどり着いて観察を開始するということがある。そのように自然に形成される集団も、この偶発的集団に含まれる。

図4は、通常は草むら等に生息するベニマシコという赤色の小鳥が複数羽、樹上の観察しやすい場所に出現した際に、一気に形成された集団である。この集団の構成員はお互いに知り合いではないが、出現中の野鳥についての情報については、通常口頭で交換される。そしてこの集団は、該当する野鳥が飛散してしまった場合、容易に解体されることも、特徴のひとつである。



図4 ベニマシコに集まるバードウォッチャー

### 3 - 3 刹那的集団

刹那的集団と名づけられたものは、フィールドの外部において、とある特定の野鳥が出現したとの情報が拡散的に伝達されていったことによって、比較的大きな集団が一時的にフィールドに形成されるタイプである。

過去において観察例の少ない野鳥の出現情報は、野鳥観察を趣味とする少数の知り合い同士の間で、電話等によって共有されるものであった。ところが、近年のインターネットや携帯電話の発達により、そしてまたバードウォッチャー人口の増大により、バードウォッチャーが高い関心を持つ特定の野鳥が出現した際には、その情報が非常に短期間かつ広範に広まることになってきている。そして何か特別な野鳥の出現と出現情報にしたがって、特定のフィールドの一箇所に多数のバードウォッチャーが集まることになり、比較的大人数の集団が形成される。

図5の風景は、毎年3月頃に首都圏のとある公園に出現する、美麗種であるヒレンジャクの観察・撮影に集まったバードウォッチャーである。これらの人々はこのフィールドで通年観察をしている人々だけではなく、多くが出現情報を受け取ってこのときだけ外部からやってきている。天候の良い休日にはその数が特に多くなる傾向が見られる。

図6の風景は、日本初記録となるキヅタアメリカムシクイが某海岸の民家下に出現した



図5 ヒレンジャクに集まるバードウォッチャー

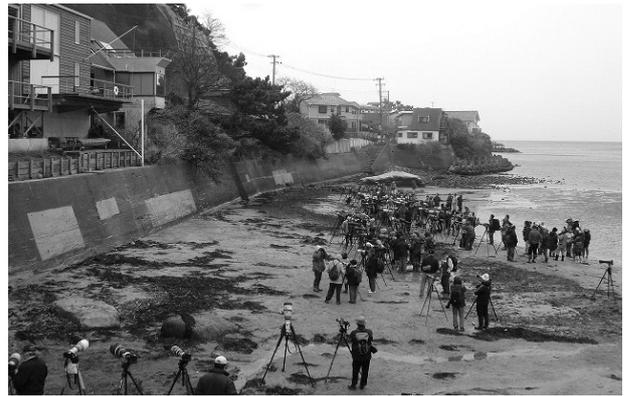


図6 キヅタアメリカムシクイの出現場所

(益子理氏提供)



図7 英国でのマダラウミスズメ出現時

(出所 <http://www.surfbirds.com/Features/lbmurrelet06.html>)

際に、全国各地から多くのバードウォッチャーが集まった際のものである。この時は最大で約200名が一羽の野鳥を観察するために、同じ海岸に集合した。

図7の写真は、英国のDevonという海岸に出現したマダラウミスズメを観察するために集まったバードウォッチャーである。刹那的集団が形成されるのは、日本のみではないことが、この写真からも明らかである。

### 4. まとめ

バードウォッチャーが形成する（ことがある）集団を観察し類型化を試みた結果、以上のとおり3つのタイプの集団、すなわち組織的集団・偶発的集団・刹那的集団があるということが明らかになった。そしてそれぞれの集団には、特定の特徴が認められた。例えば

表1 3つの集団が持つ性格の比較

	集団が維持される期間	コミュニケーションの内容	自然保護への寄与
組織的集団	長期	さまざまな情報	高い
偶発的集団	極短期	鳥の位置・識別	不明
刹那的集団	極短期	出現情報	低い

組織的集団には、集団の構成メンバーが恒常的であるか、期間を区切って変化しない、という特徴が備わる。偶発的集団には、散在型から偏在型への移行のダイナミズムを見ることができ、刹那的集団には、フィールドの外で拡散した情報にしたがって特定のフィールドの一箇所にバードウォッチャーが集結する、という特徴がそれぞれ備わる。

以上のことから、バードウォッチャーがフィールドにおいてどのように振る舞いそしてどのような集団を形成しているのかを観察し分類を試みることを通じて、集団形成を支える要因として、野鳥の出現情報とその場所に関する情報の伝達が重要である、ということの示唆を得ることができた。

3つの集団が、集団を継続する期間、そこで交換されるコミュニケーションの内容、そして自然保護への具体的な寄与について、以上で明らかになった内容を整理すると、表1のとおりとなる。

## 5. 考察

バードウォッチャーが形成する集団が、自然保護に対してどの程度寄与するか、もしくは貢献できるかについては、組織的集団の一部ではその期待度は高く、偶発的集団では不明、刹那的集団では「低い」(表1)。バードウォッチングのような自然を相手とする趣味を持つ人々の環境意識は、通常は一般的に高いため、自然保護への寄与の程度も高くなると考えることが可能である。ところが、バードウォッチャーの集団をその特徴にもとづき分類した結果、自然保護への寄与は、集団の

タイプによって異なったものとなる。特に刹那的集団は、バードウォッチャーの集団としては極めて特異的である。そこでこのバードウォッチャーによる刹那的集団について、その特徴や傾向について詳しく振り返ってみることにする。

野外のフィールドにおいて、図5や図6のようなバードウォッチャーの集団が実際に形成されている。刹那的集団は、野鳥の出現情報に基づいて当該フィールドに一時的に赴き、観察や撮影を行うバードウォッチャーの集団であるが、大人数が一箇所に集まることによって、さまざまな問題が発生する。特に大きな問題は、当該フィールドにバードウォッチャーが多数殺到することによる環境へのインパクトの高まりである。大人数が、極く短期間に特定のフィールドの特定個所に来訪し、一定時間滞在することによって、土地の踏み固めや踏み荒らしなどが当然発生する。またタバコやゴミの散乱放置も残念ながら発生している。当該フィールドが不便なため自家用車によって来訪したバードウォッチャーが多い場合には、周辺地区に長時間の駐車が多発し、それが違法である場合と違法でない場合があるものの、たとえ違法でない場合であったとしても、当該周辺地区の人々の暮らしや一次産業等の作業に対し、多大な迷惑や影響をもたらすこともある。さらに、出現した野鳥の観察や撮影のため、本来は野生状態におくべきところをその野鳥に餌付けを試みたり、またその野鳥に近寄りすぎて飛ばしてしまったり、良好な写真を撮影するために一部風景を修正したりする、などの問題行動も多く発生している。刹那的集団が形成されたのが都市部の公園等であれば、当然野鳥観察以外の利用もあり得るし、むしろそちらの方の利用者数が多いはずであるが、それら他の利用者に対して野鳥撮影を優先すべき等の有言無言のプレッシャーを与え、通常の利用を控えさせるなどのことも発生している。さらには通

常の暮らしを営んでいるその土地の人に、特異な集団が急に集まり増大していくことを見せつけることで、不気味さや不可思議さなどの印象を与えることもある。

以上のように、刹那的集団というものは、集団の構成員が自然保護観を高めていくようなバードウォッチングではなく、反対にバードウォッチングという行為を展開するなかで、さまざまな社会軋轢を生んだり、意図しない自然破壊を発生させたりしてしまう、という傾向をも有する。バードウォッチングという趣味を展開していく中で、刹那的集団の発生を見る機会は印象の上ではあるが比較的数量多くなってきており、集団発生機会は増加してきているようである。

ゴッフマン (1980) によって、「社会的集まり」は、「一定の連続した時間内に相互に他者と居合わせる人々の集合であり、その集合によって社会的状況の範囲が明確に区分される」とされているが、刹那的集団はこの社会的集まりであること、そしてこの集団が持つ「社会的状況」すなわち何らかのしがわなければならない規範は、非常に緩やかなものとなっていて、必ずしも自然保護や自然保護意識の高まりに寄与しない、環境意識の低い集団、という性格を有するものとなっている。

バードウォッチャーによって形成される集団のそれぞれが、自然保護意識・自然保護にどの程度の寄与を果たせるかについて、整理すると、図8となる。

今回類型化することができた3つの集団の中で、自然保護意識や自然保護への寄与が高いのは、組織的集団の一部、具体的には実際の自然保護活動を活動に組み入れ展開している組織や団体が構成する集団であり、反対にそれらが低いのは、刹那的集団である。偶発的集団と一部の組織的集団については、自然保護意識や自然保護への寄与の高低について、今回の分析では明らかにすることができなかった。

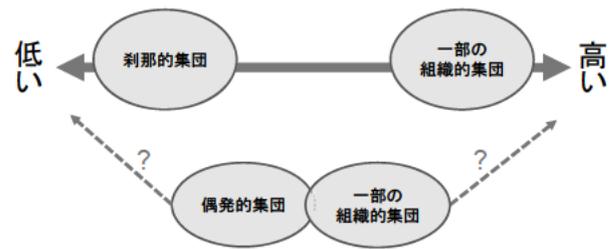


図8 自然保護意識・自然保護への寄与の程度

偶発的集団や組織的集団の一部がどのような自然保護観を持つものであるか、また3つの集団が具体的にどのような環境意識を把持しているのかについては、今後の検討課題である。

#### 補注

1) 本稿の中で用いた写真は、特に断りのないものに限り筆者による撮影である。

#### 付記

本研究は、2010年5月に開催された日本環境教育学会第21回大会で報告した「ナチュラリストの集団形成に関する研究(2)」を大幅に改訂し、新たな分析を加筆したものである。

#### 引用文献

- 高橋正弘 (2010a) バードウォッチャーによる集団形成について、日本環境教育学会関東支部年報、No.4、1-4
- 高橋正弘 (2010b) ナチュラリストの集団形成に関する研究(2)、日本環境教育学会第20回大会(沖縄)研究発表要旨集、
- E・ゴッフマン (1980) 集まりの構造(丸木恵祐・本名信行訳)、誠信書房